

キルギス語の語頭子音 *k* にみられる有声無声の交替について¹⁾

大 崎 紀 子

はじめに

キルギス語はチュルク語の方言の一つで、東西に長く帯状に広がるチュルク語の分布域のほぼ中央付近に位置し、天山山脈の北麓に国土を有するキルギスタンを中心に、周辺のカザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、中国新疆ウイグル自治区などに約 260 万人の話者をもつ言語である。

本稿では、キルギス語の語頭子音 *k* をめぐる問題について論じる。キルギス語の実際の発話を聞いていると、有声軟口蓋音の [g]、あるいは有声口蓋垂音の [ɣ] を語頭にもつ語がしばしば現れる。しかしながら、キルギス語において、[g] や [ɣ] などの子音は語頭では用いられないと伝統的に考えられており、語頭にこれらの子音をもつのはキルギス語に固有の語彙ではないもの、すなわち借用語に限られるとされている。だが、実際には、キルギス語の固有語彙であっても、語頭子音が有声の [g] や [ɣ] で発音される場合が多く観察される。このような場合、先行研究では無声の語頭子音 *k* あるいは *q* が、先行する語の語末音の影響により、同化によって有声化する現象だと説明されてきた。本稿では、このような先行研究の説明に対し、単純な同化現象であると考えるのは疑問であるということを主張したい。

以下では、キルギス語の音素と正書法の関係について簡単に整理した上で、具体的な問題の提起とその検討に入ることにする。

I キルギス語の音素と正書法の関係

庄垣内 1992: 1418, Kirchner 1998: 345 をもとに、キルギス語の子音の体系を示すと次の

1) 本稿の内容は、2000年11月日本言語学会第121回大会（於名古屋学院大学）で口頭発表したものに加筆訂正したものである。なお、この研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）「チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズムに関する調査研究」（研究代表者 林 徹）による援助を受けている。キルギス語のデータに関しては、キルギスタンオシュ出身のチナーラ・アブディカディオワさん、ビシケク出身のアイヌーラ・ジュマグロワさん、サバルベク・オシュラフノフさんに言語コンサルタントとして協力していただいた。

ようになる。

(1)	両唇	歯茎	後部歯茎	軟口蓋	口蓋垂
閉鎖音無声	p	t		k	q
有声	b	d		g	
破擦音無声		(c[ts])	č[tʃ] (šč[ʃtʃ])		
有声			ʃ[dʒ]		
摩擦音無声	(f)	s	š[ʃ]		(χ)
有声	(v)	z	(ž[ʒ])		ʁ
鼻音	m	n		ŋ	
接近音			y		
側音・ふるえ音		l r			

() 内は借用語のみ

キルギスタンのキルギス語では、1940年以降キリル文字による正書法がおこなわれているが、上に示した子音のすべてが文字表記の上で区別されるわけではない。例えば、c, ž, ščは、もっぱらロシア語からの借用語に現れる子音であるが、このうちžは、jを表す文字と同じ文字で表記される。

そして、本稿で重要なのは、kとq、およびgとʁが、音声的には明らかな違いがあるにも関わらず、キリル文字による表記上は区別されないという点である。実際、「k, gはキルギス語の前舌母音系列の語に、q, ʁは後舌母音系列の語に現われ、kとq, gとʁは互いに補い合う関係にある」[庄垣内1992: 1418]ため、それぞれを文字表記上区別する必要はない。そこで、k, qは一つの文字「к」で、g, ʁは同様に「г」の文字で表記される。このことは、キルギスタンのキルギス語におけるキリル文字表記の特徴の一つとなっている。なぜなら、中国内のアラビア文字で表記されるキルギス語ではそれぞれが文字表記上も区別されており、また、言語的に非常に近い関係にあると言われるカザフ語でも、キリル文字による表記では、kは「к」、qは「қ」、gは「г」、ʁは「ғ」というそれぞれ異なる文字が与えられ、正書法上の区別があるからである。

このようにキルギス語の正書法上はkとq, gとʁの区別はおこなわれないものの、キルギス語の音素認定の上では異なる扱いが必要である。庄垣内1992では、「k, gが後舌母音と結合する多くの定着借用語が見られるので(例:kopiya「複写」, gazeta「新聞」, いずれもロシア語から)、ここでは、この4種をそれぞれ独立した音素として認めておきたい」と述べられている。本稿でもk, g, q, ʁを各々区別して議論する必要があり、庄垣内1992の考え方に従って、それぞれを独立した音素として扱いながら論を進めていくことにする。

II キルギス語の子音交替現象と語頭子音の交替についての従來說

キルギス語では、語幹と接尾辞の結合部分において、さまざまな子音の交替が見られるが、その多くは声に関する交替である。例えば、多くの接尾辞の初頭子音は、接尾辞が付く語幹の最終子音や最終母音によって交替する。具体的には、too「山」に与格接尾辞が付くと too-go「山に」になるのに対し、ot「火」では ot-ko「火に」なるなどである。

また、p, k, q で終わる語幹に母音で始まる接尾辞がつくと、語幹末の無声子音 p, k, q は、次の(2)に見るように、母音に挟まれた場合にのみ有声化する。(2b)のように、共鳴子音と母音に挟まれた位置では有声化は起きない。(*の記号が付いたものは、それがキルギス語の母語話者に許容されないことを示す。)

- (2) a. kitep「本」+ -im (1人称単数所有接尾辞) > kitebim「私の本」
 tap-「見つける」+ -il (受動接尾辞) > tabil-「見つけられる」
 ešik「ドア」+ -i (3人称所有接尾辞) > ešigi「そのドア」
 tik-「縫う」+ -il (受動接尾辞) > tigil-「縫われる」
 ayaq「足」+ -i (3人称所有接尾辞) > аyaкi「彼の足」
 joluq-「会う」+ -uš (相互接尾辞) > jolukuš-「出会う」
- b. qalp「嘘」+ -i (3人称所有接尾辞) > qalpī「彼の嘘」
 *qalbī
 körk「風景」+ -ü (3人称所有接尾辞) > körkü「その風景」
 *körgü
 qırq「40」+ -inči (序数詞) > qırqinči「40番目」
 *qırqinči
 qorq-「恐れる」+ -ut (使役接尾辞) > qorqut-「恐がらせる」
 *qorqut-

p, k, q は、apa「母」、eki「2」、aqıl「知恵」などのように、語根内では母音に挟まれた位置にあっても有声化するわけではない。また、同じ閉鎖音系列の子音でも、t は p, k, q と同じ条件下でも有声化は生じない。すなわち、unut-「忘れる」に受動接尾辞 -ul が接続すると unutul-「忘れられる」となり、“unudul-”にはならない。また、kurt「虫」に3人称所有接尾辞が接続すると kurtu「その虫」となり、“kurdu”とはならない。この点、同じチュルク語のトルコ語では、unutmak「忘れる」に受動接尾辞 -ul が付くと unutulmak「忘れられる」となり、kurt「虫、狼」に3人称の所有接尾辞が付くと kurdu「その虫、その狼」になるように、tにも、p, k, q と同様に有声化が見られるのとは異なる

る²⁾。

以上で述べたような語幹末子音の交替は、義務的なものであり、正書法の上にも表される交替である。これに対して、本稿で考察する語頭子音の有声・無声の交替現象は、義務的なものではなく、正書法にも反映されないものである。すなわち、Imart 1981 が、連声 (sandhi) の現象として紹介した次のような子音交替である (なお、以下のキルギス語の表記において斜体字で表したものはキリル文字による正書法の表記をローマ字化したもの³⁾、正体字で表したものは音素による表記である⁴⁾)。

(3)	<i>maga</i>	<i>kel</i>	maɣa gel	「私のところにおいで」
	私 (与格)	来る (命令)		
	<i>bul</i>	<i>kitep</i>	bul gitep	「この本」
	この	本		[Imart 1981: 8]
	<i>kelesoo</i>	<i>kör-ün-ö-süŋ</i>	keleso: görünösün	「君は異常に見える」
	異常な	見る-再帰-現在-2 単		
	<i>ooz-u</i>	<i>küyšik</i>	o:zu küyšiq	「口がゆがんで」
	口-3 所	曲がった		[Imart 1981: 440]
	<i>suluu</i>	<i>kiz</i>	sulu: kis	「きれいな娘」
	きれいな	娘		[Imart 1981: 441]

上記の現象について Imart 1981 は、k, q は、(2a) に挙げたように語幹末と接辞の境界位置において母音に挟まれた場合に有声化が起きるだけでなく、(3) のように一定の子音と「語の外側において接することによっても有声化が起きる」⁵⁾ [Imart 1981: 8] と述べてい

2) トルコ語では、p, t, k のほか、ç[tʃ] のような破擦音でも有声化が見られる。

3) キリル文字による正書法の表記からローマ字への翻字法は次の通りである。

a=a, б=b, в=v, г=g, д=d, е=e, ё=yo, ж=j, з=z, и=i, й=y, к=k, л=l, м=m, н=n, Һ=ɥ, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, Ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ш=š, щ=šč, ь=" , ы=i, ь=', э=e, ю=yu, я=ya

4) ただし、音素表記とするのに問題がある箇所では [] を用いて表す音声表記を併用する場合があります。

5) "sonorisation des mêmes sourdes /p, k/ mais au contact amont ou aval de voyelle (position intervocalique) ou de certaines consonnes à la juncture extérieure de Mots." [Imart 1981: 8].

Imart は上記のように、この現象を p, k に共通して見られるものとして記述しているが、Imart 1981 に挙げられた具体例は次のようなものである：taap al-dī [taβatdī] 「彼は見つけた」 [Imart 1981: 441]。同様の現象は、top oyno- [toβojno] 「ボール遊びをする」、kep uk- [keβuk] 「言葉を聞く」などのほか、jok ele [dʒogele] 「無かった」、ak ala [aβata] 「白まだらの」などにも見られ (cf. Abduldaev 1987: 64)、確かに p, k に共通して見られる現象ではある。しか

る。このように Imart 1981 では、(3) のように語頭の *k* が有声で発音される現象は、一般に外連声 (external sandhi) と呼ばれる現象として捉えられ、子音に関わる連声現象の多くがそうであるように、同化作用によるものであると考えられているのである。

また, Abduldaev 1987 でも, *n* で終わる語に *k, q* で始まる語が後続する場合には, 同化により語末子音 *n* が軟口蓋音の η になり, 語頭子音 *k* は有声の *g, ɣ* に変化すると述べて, 次のような例が挙げられている [Abduldaev 1987: 61]。

- | | | | |
|-----|---|------------|----------------------|
| (4) | <i>tün</i> <u><i>kir</i></u> - <i>dī</i> | tün ɣirdi | 「夜になった」 |
| | 夜 入る-過去- \emptyset (3単) | | |
| | <i>aman</i> <u><i>kel</i></u> - <i>dī</i> | aman ɣeldi | 「(彼は) 無事に帰って来た」 |
| | 無事に 来る-過去- \emptyset (3単) | | |
| | <i>ton</i> <u><i>kiy</i></u> - <i>dī</i> | ton ɣiydi | 「(彼は) 上着を着た」 |
| | 上着 着る-過去- \emptyset (3単) | | |
| | <i>een</i> <u><i>kal</i></u> - <i>dī</i> | e:ɳ kaldī | 「空になった」 |
| | 空の 残る-過去- \emptyset (3単) | | [Abduldaev 1987: 61] |
| | <i>men</i> <u><i>kim</i></u> | meɳ gim | 「私は誰？」 |
| | 私 誰 | | |
| | <i>jön</i> <u><i>koy</i></u> | jön ɣoy | 「放っておけ」 |
| | 脇 置く (命令) | | [Abduldaev 1987: 64] |

Abduldaev 1987 にはさらに次のような例が見られ, *n* 以外の共鳴子音や母音との組み合わせでも *k*~*g* の交替が見られることが分かる [Abduldaev 1987: 64]。

- | | | | |
|-----|--|------------|----------|
| (5) | <i>šam</i> <u><i>küy</i></u> - <i>dü</i> | šam ɣüydü | 「蠟燭が燃えた」 |
| | 蠟燭 燃える-過去- \emptyset (3単) | | |
| | <i>kar</i> <u><i>ket</i></u> - <i>tī</i> | qar getti | 「雪が融けた」 |
| | 雪 行く-過去- \emptyset (3単) | | |
| | <i>kara</i> <u><i>küröŋ</i></u> | qara ɣüröŋ | 「黒褐色」 |
| | 黒 褐色 | | |

Abduldaev は (5) のような例について「共鳴子音と *k* との結合が母音間に位置するこ

↓し, これは, 語末の *p, k* が後続する語の初頭の母音と一つの音節を形成して起きる有声化現象であり, 本文 (2) に挙げた語幹末子音の交替に準じて捉えられるべき現象であって, 本論で問題にしている語頭の *k* の有声無声の交替とは区別して考えなければならない。

Ⅲ 語頭子音 *k* が表すもの

既に述べたとおり、キルギス語の固有語彙に限って言えば、*k* は前舌母音とともに、*q* は後舌母音とともに現れ、対立することはない。キリル文字による正書法の上でも *k*, *q* の区別はなく、同じ文字が与えられている。しかし、筆者の調査によれば、前舌母音に先行する *k* と、後舌母音に先行する *q* の間には、正書法上同じ文字で表されていても、そのふるまいの上で明確な差異が認められる。

以下では、先行研究に挙げられた例を一つ一つ確認しながら、*k*~*g* と *q*~*ɣ* の交替に見られるそれぞれの性質の違いを明らかにしていく。

1 先行研究に挙げられたもの

まずは、先行研究に挙げられた語頭子音 *k*~*g* 及び *q*~*ɣ* の交替例について検討する。

1.1 *k*~*g* の交替に関するもの

Imart 1981, Abduldaev 1987 に挙げられた例は (3)~(5) に示したとおりである。ここに、前舌母音に先行する *k*~*g* の交替に関わるものだけを改めて挙げる。

(7) <i>maga</i> <u><i>kel</i></u>	maɣa gel	「私のところにおいで」
<i>bul</i> <u><i>kitep</i></u>	bul gitep	「この本」
<i>kelesoo</i> <u><i>kör-ün-ö-süŋ</i></u>	keleso: görünösüŋ	「君は異常に見える」
<i>tün</i> <u><i>kir-di</i></u>	tün girdi	「夜になった」
<i>aman</i> <u><i>kel-di</i></u>	amaŋ geldi	「(彼は) 無事に帰って来た」
<i>ton</i> <u><i>kıy-di</i></u>	toŋ giydi	「(彼は) 上着を着た」
<i>men</i> <u><i>kım</i></u>	meŋ gim	「私は誰？」
<i>šam</i> <u><i>küy-dü</i></u>	šam güydü	「蠟燭が燃えた」
<i>kar</i> <u><i>ket-ti</i></u>	qar getti	「雪が融けた」
<i>kara</i> <u><i>küröŋ</i></u>	qara güröŋ	「黒褐色」 (Cf. (3)~(5))

しかし、これらの先行研究において先行語の語末音の影響によって有声化すると記述された語頭子音 *k* は、実際には、先行する語がなくても有声音で発音されることが多い。(「#」の記号は、先行する語がない絶対語頭位置にあることを示す。)

(8) <u><i>kel-be-se</i></u>	#[g]elbese ~ [k]elbese	「彼が来ないなら」
来る-否定-仮定- \emptyset (3単)		

<u>kitep</u> bar	#[g]itep ~ [k]itep	「本がある」
本 ある		
<u>kör</u> -bö	#[g]örbö ~ [k]örbö	「見るな」
見る (命令)-否定		
<u>kim</u>	#[g]im ~ [k]im	「誰？」
誰		
<u>küroŋ</u> tuflı	#[g]üroŋtuflı ~ [k]üroŋtuflı	「茶色の靴」
茶色 靴		

上の例で *kel*-「来る」では [kel], [gel] の両方の発音が認められる。また, *kitep* 「本」は, [kitep], [gitep] どちらの発音でもよい。このことは, (7) の語頭に *k* をもつすべての例において同様である。この限りにおいて, 語頭の *k* と *g* は対立がなく, 語頭位置では自由変異としてどちらの音も現れうるということになる。

1.2 q~ɣ の交替に関するもの

Imart 1981, Abduldaev 1987 に挙げられた例のうち, *q~ɣ* の交替に関わるものだけを改めて次に挙げる。

(9) <u>ooz</u> -u <u>kıy</u> şık	o:zu ɣıyşiq	「口がゆがんで」
<u>suluu</u> <u>kız</u>	sulu: ɣıs	「きれいな娘」
<u>een</u> <u>kal</u> -dī	e:ŋ ɣaldī	「空になった」
<u>jön</u> <u>koy</u>	jön ɣoy	「放っておけ」

(Cf. (3) (4))

筆者の調査によれば, (9) の例は, 先行する語がないときにも語頭の *k* が有声摩擦音で発音される場合がまったくないわけではない。

(10) <u>kıy</u> şık	#[q~ɣ]ıyşiq	「ゆがんだ」
<u>kız</u> -dar	#[q~ɣ]ızdar	「娘たち」
<u>kal</u> -iŋiz-čī	#[q~ɣ]alıŋisčī	「残ってくださいよ」
残る (命令)-2 単-助詞		
<u>koy</u> -up <u>koy</u>	#[q~ɣ]oyup qoy	「置いておけ」
置く-副動詞 置く (命令)		

しかしながら, 前節で述べた *k~g* の交替の場合と異なり, (10) のように絶対語頭位置で *q~ɣ* の交替がみられるのはキルギス語において一般的なことではない。ほとんどの場合

は、次に見るように、先行する語がなければ無声音の *q* として現れ、有声の *ɣ* で現れることはない。

- (11) a. *abdan kizik curoo* *abdan [q~ɣ]iziq* 「非常に面白い質問」
 非常に 面白い 質問
 kizik curoo *#[q]iziq *#[ɣ]iziq* 「面白い質問」
 面白い 質問
- b. *men karši-min.* *men [q~ɣ]aršimīn* 「私は反対だ」
 私 反対-1 単
 karši *#[q]arši *#[ɣ]arši* 「反対」
 反対
- c. *čoŋ kuš* *čoŋ [q~ɣ]uš* 「大きな鳥」
 大きな 鳥
 kuš-tay *#[q]uštay *#[ɣ]uštay* 「鳥のように」
 鳥 のように
- d. *anīn koy* *anīn [q~ɣ]oy* 「彼の羊」
 彼 (属格) 羊
 koy-lor *#[q]oylor ~ *#[ɣ]oylor* 「羊たち」
 羊 複数

また、語頭の *q* と *ɣ* については、次のようなミニマル・ペアも存在する。

- (12) *kana qana* 「どこ」 *gana ɣana* 「だけ」
 kagaz kana *qɑkɑs qana* 「紙はどこ？」
 kagaz gana *qɑkɑz ɣana* 「紙だけ」

k と *g* についても次のようなミニマル・ペアが存在するが、正書法上の区別は明確であるものの、発音上は同じになってしまう場合がある。

- (13) *kül* *[k]ül ~ [g]ül* 「灰, 燃えかす」
 gül *gül* 「花」

以上の事実から、語頭位置における *q* と *ɣ* の対立と、*k* と *g* の対立とでは、性質が異なるものだと考えられる。このうち、*k* と *g* に関しては、(8) を見る限りでは語頭において対立はなく、自由変異としてどちらの音も現れうるように見える。この点について、以下で

さらに詳しく検討する。

1.3 語頭における k と g

本節では、語頭に k をもつとされる語彙について、次の①～③の三つの観点からテストをおこない、その現れ方を観察した。

① 先行語がないとき

既に述べたとおり、語頭に k をもつとされる多くの語彙において、語頭の子音は、先行する語がなくても有声音で発音されることが多い。

(14) <u>kičine</u>	#[g]ičine ~ [k]ičine	「少し」
<u>kečöö</u>	#[g]ečö: ~ [k]ečö:	「昨日」
<u>kün</u>	#[g]ün ~ [k]ün	「天気, 日」
<u>köp</u>	#[g]öp ~ [k]öp	「たくさん」

② 先行語の語末無声子音との関係

先行する語の語末が無声子音の場合は、通常 k で現れるが、先行する語との間にポーズを置けば、g とする発音も許容される。(「|」の記号は、その位置にポーズが置かれることを示す。)

(15) <u>isik</u> <u>kün</u>	isiq [k]ün ~ isiq [g]ün	
熱い 日		「あつい日差し」
<u>bar-ip</u> <u>kel-di-k</u>	barip [k]eldik ~ barip [g]eldik	
行く-副動詞 来る-過去-1 複		「私たちは行って来た」

③ 先行語の語末阻害音との関係

キルギス語においては、語末の有声阻害音は z に限られる。しかし、この語末の z の有声音は極めて弱く、通常、無声化して s と発音される。語末の z が有声音として実現するのは、後続する語の語頭に母音ないし有声音が来たときに限られる⁶⁾。

6) 本文に記した通り、語末の z は多くの場合無声化して現れる。中には、az 「少ない」のように、後続語の初頭に有声音がきても語末の z が無声音 s のままで現れるものもある。e.g. Az bol-so da [asbolsoda] 「少しあっても」

かった。しかし、①～③のテストの結果が示しているのはそれだけにとどまらず、語頭の *k* が有声音で発音される場合は、従来説の言うように同化によって無声の *k* が有声化するのではなく、本来有声の *g* がそのまま現れているにすぎないと思えるべきだということである。そのように考えれば、①～③のふるまいが矛盾なく説明できる。

既に述べたとおり、キルギス語本来の語彙においては、*g* や *ɣ* は語頭に現れないと伝統的に考えられている [胡 1986: 9, 庄垣内 1992: 1418]。実際に、Yudaxin 1965 の辞書を見ると、*k* や *q* で始まるものは 7,000 個を越える語彙が見出し語として収録されているのに対し、*g* や *ɣ* で始まる語彙は僅か 250 個程度しかない。しかも、そのほとんどが借用語である。このように辞書登録の上で一方が他方の 30 倍近いという極端な語彙数の偏りが見られるという事実は、有声の *g* や *ɣ* を語頭にもつ語が、キルギス語を含む東方のチュルク語には存在しないという伝統的な考え方に基づくものである。しかし、伝統的に語頭には現れないとされている *g* が、なぜ実際の発音には現れてくるのだろうか。次節ではこの問題について考えてみたい。

1.4 語頭に現れる *g* の存在について

上述のように、実際の発音の分析からは語頭における *g* の存在がうかがえるのだが、*g* は伝統的にキルギス語の語頭には現れないとされている。これはどういう理由によるものだろうか。

この問題に関連して、Abduldaev 1998 に、語頭に *g* の音をもつ一部の借用語とその表記の関係についてふれている記述がある。それによれば、*kilem* 「絨毯」、*kümböz* 「円屋根の墓」はいずれもイラン諸語からの借用語であるが、本来イラン諸語では有声の *g* で始まる語であったものが、「キルギス語においては *g* で始まる語が用いられなかったことから *kilem*, *kumboz* と発音されたことによって文字の上でもそのようになった」のだという。だが、同じイラン語からの借用語でも *gül* 「花」については事情が異なり、はじめは *kül* と発音され、そのように表記されたが、キルギス語の固有語彙に *kül* 「灰」という語があったため、これと区別するために *gül* 「花」という表記が定着したと Abduldaev は述べている [Abduldaev 1998: 125]。

確かに、1965 年に作られた Yudaxin の辞書には、*gül* という表記と *kül* という表記とが併記されており、当時にはまだ両者の間に“ゆれ”があったことを示している。しかし、当時から 40 年近く経った現代では、*kül* が「灰」を、*gül* が「花」を表すという表記が定着し、これに伴ってか、(13) でも示したように、*kül* という発音が「花」を意味することはなくなっている。だが、*kilem* 「絨毯」、*kümböz* 「円屋根の墓」について言えば、Abduldaev 1998 は上のように述べてはいるものの、現代語における実際の発音は、表記法の定着に関わらず [g]ilem ~ [k]ilem, [g]ümböz ~ [k]ümböz である。これは、借用元の言語の音が現代まで維持されていると言うよりも、完全にキルギス語の音韻体系に取り入れられた後

も語頭の有声音 *g* が支障なく存在しているというべきであろう。

ここでキルギス語以外のチュルク語に目を転じてみると, *gül* 「花」や *kilem* 「絨毯」のほか, *kürüç* 「稲」, *kübö* 「証人」などのイラン語からの借用語は, それぞれの方言で次のように現れる。

(19)	Kyrgyz	<i>gül</i> 「花」	<i>kilem</i> 「絨毯」	<i>kürüç</i> 「稲」	<i>kübö</i> 「証人」
	Kazakh	<i>gül</i>	<i>kilem</i>	<i>küriř</i>	<i>kuä</i>
	Azerbaijan	<i>gül</i>	<i>kilim</i>	<i>düyü</i>	<i>řahid</i>
	Turkish	<i>gül</i>	<i>kilim</i>	<i>pirinç</i>	<i>řahit</i>
	Turkmen	<i>gül</i>	<i>kilim</i>	<i>tüwi</i>	<i>řayat</i>
	Uzbek	<i>gul</i>	<i>gilam</i>	<i>gurunç</i>	<i>guvoh</i>
	N. Uyghur	<i>gül</i>	<i>giläm</i>	<i>gürüç</i>	<i>guvahçi</i>
	Tatar	<i>göl</i>	<i>keläm</i>	<i>doge</i>	<i>řahit</i>

アゼルバイジャン, トルコ, トルクメン語は通常チュルク語オグズ語群に分類され, 用いられる語彙が非オグズ語とは異なる場合が多いと言われるが [Johanson 1998: 119], このことは (19) の「稲」や「証人」などの語彙にも現れている。そして, ここで注目すべきは, チュルク語南東グループに属するウズベク, 新ウイグル語で上の借用語「花」, 「絨毯」の語頭子音が有声音で現れている点である。同じイラン語からの借用語でも「道, 通り」を表す語は, キルギス語 *köçö*, カザフ語 *köře* に対し, ウズベク語 *koča*, 新ウイグル語 *koča* であり, また「ボウル」を表す語は, キルギス語 *kese*, カザフ語 *kese*, ウズベク語 *kosa*, 新ウイグル語 *qača* である。したがって, チュルク語北東グループ (キプチャクグループ) に属するキルギス語やカザフ語で現れる語頭子音 *k* が, 南東グループのウズベク語や新ウイグル語で有声の *g* に規則的に対応するというわけではない。しかし, (19) に見るようにいくつかの借用語の語頭子音では, 北東グループにおいて無声の *k* で現れるものが南東グループでは有声の *g* で現れるという対応が見られる。

さらに借用語だけでなくチュルク語固有の語彙について, キルギス語などの語頭の *k* が, トルコ語などの南西グループ (オグズグループ) では, *g* で現れる場合がかなりある。前述のように, イラン系言語の影響によって有声化したと言われているものである。

(20)	Kyrgyz	<i>kel-</i> 「来る」	<i>kerek</i> 「必要」	<i>kör-</i> 「見る」	<i>kün</i> 「日」
	Kazakh	<i>kel-</i>	<i>kerek</i>	<i>kör-</i>	<i>kün</i>
	Azerbaijan	<i>gäl-</i>	<i>gäräk</i>	<i>gör-</i>	<i>gön</i>
	Turkish	<i>gel-</i>	<i>gerek</i>	<i>gör-</i>	<i>gün</i>
	Turkmen	<i>gel-</i>	<i>gerek</i>	<i>gör-</i>	<i>gün</i>

Uzbek	<i>kel-</i>	<i>kerak</i>	<i>kor-</i>	<i>kun</i>
N. Uyghur	<i>käl-</i>	<i>keräk</i>	<i>kör-</i>	<i>kün</i>
Tatar	<i>kil-</i>	<i>kiräk</i>	<i>kür-</i>	<i>kön</i>

しかしながら、本論でこれまで述べてきたように、キルギス語ではつづり字の上では *kel-*「来る」、*kerek*「必要」、*kör-*「見る」、*kün*「日」のように書かれるものが、実際には [gel], [gerek], [gœr], [gyn] と発音されることが多い。(19) に示した借用語についても、*kilem*「絨毯」、*kürüç*「稲」、*kübö*「証人」と表記されていても、実際の発音は [gilem], [gyrytʃ], [gybœ] である。このことは、チュルク語北東グループのキプチャク語群に分類されるキルギス語の中に南西あるいは南東の要素が含まれ、それが発音の上に現れているということを示しているのかも知れない。そしてさらに言うならば、語頭に *g* をもつ南西あるいは南東の要素が、新しい変化としてキルギス語の中に浸透してきているということなのかも知れない。1940年代に確立したキリル文字による正書法と現代語における実際の発音を比較すると、正書法が確立した当时には語頭に *g* という有声音を許容しない層の方が優勢であったと考えられるからである。

しかし、上記の変化過程の是非を確実に検証することは難しい。ここでは、その可能性を指摘するにとどめたい。

1.5 後舌母音に先行する語頭子音 *q* をめぐる問題

これまでで、語頭における *k*~*g* の交替が単純な同化によるものではないということは明らかになったが、次に、語頭の *q*~*ɣ* の交替はどうかを検討する。ここでも、*k*~*g* の交替を検証する際におこなった次の①~③の三つの観点からのテストを適用してみることにする。

① 先行する語がないとき

前節の(11)で示したように、語頭の *q* はふつう、先行する語がない場合には無声音として現れ、有聲の *ɣ* にはならない。しかし、先行語がある場合には有聲化して *ɣ* になる場合がある。

(10) に挙げたように、先行する語がない場合にも語頭音を有聲の *ɣ* とする発音が認められる語もいくつかある。しかし、その数は非常に限られており、筆者が見つけたのは(10)に挙げたものだけである。したがって、(10)のように絶対語頭位置で *q*~*ɣ* の交替が見られるのはごく例外的な事例だと言ってよいと思う。だが、他にも同様の例がどのくらいあるのか、また、そのような例にどのような語彙的特徴が見られるのか、ということはまだ分かっていない。

- kim kofe kaala-y-t?* [k~g]im kofe [ɣ]a:layt
 誰 コーヒー 望む-現在-3単 「誰がコーヒーをお望みですか？」
 Cf.*#[ɣ]a:layt
- b. m
kilem kara-p jür-ö-m [k~g]ilem [ɣ]arap jüröm
 絨毯 見る-副動詞 行く-現在-1単 「私は絨毯を見ている」
 Cf.*#[ɣ]arap
- c. l
biyil kiš biyil [ɣ]iš
 今年 冬 「今年の冬」
 Cf.*#[ɣ]iš
bul kuš bul [ɣ]uš
 この 鳥 「この鳥」
 Cf.*#[ɣ]uš
- d. r
jer katuu jer [ɣ]atu:
 地 かたい 「地面が固い」
 Cf.*#[ɣ]atu:
- e. y
aariday kon-up a:riɖay [ɣ]onup
 蜂のように 飛ぶ-副動詞 「蜂のように飛んで」
 Cf.*#[ɣ]onup
Munu kanday kotor-so bol-o-t?
 これ(対格) どう 訳す-仮定 なる-現在-3単
 qanday [ɣ]otorso
 「これをどう訳せばいいですか？」
 Cf.*#[ɣ]otorso

ただ、これらの母音および共鳴子音が、後続する語頭子音 q に影響を与える程度には差があるようである。具体的には、語末に ŋ や n があるときに後続する q が最も有声化しやすいということができる。

しかし、先行する語の語末に ŋ や n がくれば必ず語頭の q が有声化するというわけではない。k~g の場合と同じように、借用語は先行する語の有無に関わらず、有声化しない⁹⁾。

9) 通常、前舌母音の前では k が、後舌母音の前では q が現れるが、この規則は借用語には適用さ

- (24) *kuur-ul-gan kartöškö* [k]artöškö ~ [q]artöškö
 *[g]artöškö *[ɣ]artöškö 「炒めたジャガイモ」

また、*q* で始まる疑問詞は (25a) のように有声化しにくいようであるが、(25b) のように有声化する場合もあり、*q* で始まる疑問詞が必ず有声化しないというわけではない。

- (25) a. *Senin kanča bala-ŋ bar?*
 君 (属格) 何人 子供-2 単所 ある
 [q] anča * [ɣ] anča
 「君には何人子供がいますか？」
- b. *Munu kanday kotor-so bol-o-t?*
 これ (对格) どう 訳す-假定 なる-現在-3 単
 [q] anday ~ [ɣ] anday
 「これをどう訳せばいいですか？」
 (Cf.(23c))

結 語

以上、先行研究において同化によるものとされてきたキルギス語の語頭子音 *k* ~ *g*, *q* ~ *ɣ* の交替についておこなった次の二点の主張を確認しておきたい。

- 1) 前舌母音に先行する語頭子音の *k* は有声の *g* で実現する場合があると記述されてきたが、これは先行研究が言うように同化によって有声化する現象ではなく、本来的に存在する語頭有声子音 *g* がそのまま現れているにすぎないこと。この点において「キルギス語は語頭に *g* をもたない」という伝統的な考え方は修正されなければならない。
- 2) 後舌母音に先行する *q* ~ *ɣ* の交替については、おもに同化による無声・有声の交替であること。

ただ、キルギス語内部での方言差や語彙による違いがどの程度見られるのかということや、また、借用語の中でも早い時代に導入されたアラビア語、あるいはイラン諸語からの借用語

↓
 れない。固有語彙においては対立をなさない *k* と *q* が、独立した音素として扱われている理由がここにある。コンサルタントによれば、*kartöškö* (ジャガイモ) の語頭子音は、年齢の高い層の人は *q* で、若い層の人はロシア語の発音に近い *k* で発音される傾向があるという。従って、ここで例は、前舌母音に先行する *k* の箇所であらうべきかも知れない。

と、新しい時代に入ったロシア語からの借用語とでは現れ方がどの程度違うのかということについては、今後も調査し検討する余地がある。また、カザフ語など周辺チュルク語の情報もあわせて検討する必要がある。

参考文献

- Abduldaev, E. A. (1987) Vliyanie fonetičeskix zakonomernostey na allomorfizm, *Grammatika kirgizskogo literaturnogo yazika 1 : Fonetika i morfologiya*, ed. Zaxarova, O. V., Ilim.
- Abduldaev, E. A. (1998) *Azirkī kirgiz tili*. Kīrgizstan.
- Imart, G. (1981) *Le kirghiz* 1-2, Publications de l'Université de Provence.
- Johanson, L. (1998) The History of Turkic, *The Turkic Languages*, ed. Johnson, L. & Csató, É. Á., Routledge, 81-125.
- Kirchner, M. (1998) Kirghiz, *The Turkic Languages*, ed. Johnson, L. & Csató, É. Á., Routledge, 344-356.
- Yudaxin, K. K. (1965) *Kirgizsko-russkiy slovar'*, Sovetskaya Enciklopediya.
- 胡 振華 (1986) 『柯尔克孜語簡志』民族出版社。
- 庄垣内正弘 (1992) キルギス語『言語学大辞典』三省堂, 1416-1422.
- 庄垣内正弘 (1989) チュルク諸語『言語学大辞典』三省堂, 937-950.

(京都大学大学院文学研究科)